

「…なあなあ、兄ちゃん。

また女の子に振られたんだって？」

突然の弟の問いかけに言葉を失ってしまう。

何故つい先ほどあったことをコイツが知っているのだ？ 誰にもバレないように細心の注意を払ったはずなのに。



「お…お、お前何処で
そんなこと聞いたんだ！」

「何処でって…彼女からだよ。
もしかして気付いてなかったの？
兄ちゃんが告白したの俺の彼女だよ」

「ぐ…っ、がっ！」



「兄ちゃんは必死すぎなんだよ。
彼女も言ってたぜ目がギラついでるし鼻息も荒かったってさ」

「エロいことしたいのが丸わかり
でキモくて無理だってwww」

ぐいっぐいっ



「このままじゃ兄ちゃん一生童貞かもな。おいおい、長男なのに弟に負けて恥ずかしくないのかよ？」

弟は気落ちし、背を丸めている俺の背中をグリグリと楽しそうに踏む。

コイツはいつも俺がフラれると嬉しそうに揶揄ってくる。そんなに兄が落ち込んでいる姿を見るのが楽しいのだろうか。

（なんだか段々と腹が立ってきた…）



「どうしてもって言うなら俺が兄ちゃんの
彼女作るの手伝ってあげよっか？」

「まあ自分の弟に、そんなの手伝って
もらうなんて俺なら恥ずかしすぎて
出来ないけどねw」

ぐいっ
ぐいっ



日々の積み重なる弟への怒りに自分の中で何かがブツリと切れる音がした。

(…これはお仕置きをしないといけないようだな)

(そう、年上を舐め切っている弟に社会の厳しさを教えるのは兄としての俺の義務だ！)



そして如何やらついに『コレ』を
使う時がきたようだ。通販で買った
エログッズの数々を……!!

いつか彼女ができたら使おうと
思っていたが……まさか弟相手に
使う日がこようとは。

……まあ、相手が男でも構わないだろ多分。

俺はこれから始まることの期待に小躍り
しそうな気分を抑え着々と準備を始める。

全ては今日の夜、クソ生意気な
弟に天誅を下す為に。





「おほおっ♥キュンキュン締め付けてくる弟ケツマンコ気持ちいいっ♥」

「さすが兄弟だな。まるで俺の為だけにあるみたいにジャストミートなおナホだ♥」

ズッ
ズッ
ズッ

「こんななんだったら、もっと早くから犯してればよかったよ」

「…あ、え？は？え？何…これ？」

くっく

「おっと、起きちまったか。おはよう、弟よ。
…って、まだ夜なんだけどな」

「いきなりの事で混乱しているだろう
が安心しろ。身体が傷つかないように
しっかり準備してから入れたから」

「ローションでケツ穴トロトロになるまで
弄ったし、服も汚れないように脱がして
やったんだぞ」

ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

く
く
く
く
く



ローションと腸液の混じった尻肉を上から押し潰すように激しく突き入れる。

根元はキツク締められ腸内の熱く絡み付く感覚に危うくイキそうになった。

アナルセックスがこんなにも気持ちいいとは知らなかった。こんなものを知ったらあれほどしたかった女とのセックスなんてどうでもよくなってしまう。



「ひぐっ♡いきなり何言って…っ!!
いや、それよりもこれ、とめ…っ♡」

「はあっ!ダメに決まってるんだろ
そんなの!これからお前は俺の
オナホ兼彼女になってもらうんだからな」

ズッ
ズッ
ズッ

あぐっ♡

「お前が彼女を作るのを手伝って
くれるって言うてくれたんだもん!」

「まさか一度言った言葉を覆すなんて
そんな都合のいい」とさせると思っ
てるのか?」

「それにこんなにちんこヌルヌル擦ってきやがって。本当はもっとして欲しいんだろ？」

「安心しろ今日は父さん達もいないし素直になるまでやり尽くしてやるぞ！」

ズッ
ズッ
ズッ

ズッ

はぁ♡

ハァ♡
ハァ♡
ハァ♡

あぐ♡



「おらおらっ！どうだ！ちんぽ
気持ちいいんだろ？正直になれよっ」

「はあっ♡あ、あ、あああっ♡
ん、はあっ♡ちが、これは…っ♡」

どワッ

あゝあゝ

ん

あぐう♡

「こんなキツキツに締め付けて
おいて嘘ついてんじゃねーぞ！」

「ケツマンコ犯されたがって濡れ濡れ
なのに誤魔化せるわけねえだろうが！」



ああああ

アッ
アッ

ドン

ハァハァ

「はあああああつ♡あつ、熱い…っ♡
あぐっ♡おし、り…変になるっ♡」
「まって、おかしっ、これおかしいっ♡
あつ、イクっ、イクっ！すごいの、くる
……っ！ひぐうううっ♡あぐうっ♡」

「ちっ！なに俺より先にイってるんだ！」

「ほおっ、おおおっ♡ふか、いつ
う、くあ…っ♡あ、あぁっ♡」

ビクビクと尻穴で絶頂をする弟に
休めることなく腰をぶつけ直腸内
を激しく挟る。

あぁ
あぁ

あぁ
あぁ
あぁ

ハァ
ハァ
ハァ



「今日からお前は俺のケツ穴オナホなん
だよ！ちんぽ突っ込まれて情けなく
射精した奴にはお似合いだよな！」

「ふぎゅうっ！♡おっ♡おお♡
ちが…っ♡おれ、は…そんなの—」

どわっ

あゐ
あゐ

はん
はん♡

ハァハァ♡♡



「違くねえよ！なにケツ穴アクメ
決めながらナマ言っでんだ！」

「お前には拒否権なんかねえんだよ！
おらっ！俺に忠誠誓いながらイキ狂え！」

アッ
アッ

ビッ

あぐっ

ハッ
ハッ

「は、はうっ♡ああっ♡はひっ♡
なりゅっ♡オナホでも何でも
なりゅから、もうとめてえええっ♡」

びゆるるるるっ！ぶびゆるるるるっ！

「おほおっ♡おおっ♡いぐ…っ♡
兄ちゃんのザーメンどばどば出されて
…ひぐっ♡あぁっ♡イクうるるっ♡」

ビクッ

ビクッ
ビクッ
ビクッ

はぁ♡

「お、おおっ♡くそ気持ちいいな、この雌穴♡
明日からは毎日使ってやるからちゃんと
何時でも出来るように準備しとくんだぞ」

「あ、はは♡はは♡…はぁい♡」

「う、あ…っ♡ちよ、ちよっと待ってっ。
そんなの入らないよっ!」

「こんなエッチな匂いさせて準備万端
なのに、入らないわけねえだろう」

「ふくうっ!あぐっ!ん、ん…っ!」

ひん

あぐっ

ヒッ

あぐっ♡

あぐっ



「ほら見る。こんな簡単にズブズブ入って
くだらうが。俺のチンコが入ったのに
この程度が無理なわけねえんだよ」

「こんなケツの穴ヒクヒクさせながら
欲しがりやがって！」



角度を変えながら刺激を与える度に出る
弟に雌声にこちらまで興奮してしまう。

男に犯されるために生まれてきたような
コイツが女にモテてるというのだから
全くもっておかしな話だ。





「ふぐう♡あ、あああ♡うくう♡」

「息荒くしながらこんなエロい声
出しやがって。バイブ突っ込まれて
ホジられるのがそんないのかよっ」

「だ、だって♡あぐっ! ああっ!
そん、な…激しくされたらっ♡」

「ひぎゅっ♡ああっ♡お尻変になるう♡」

ひん♡

はあ♡

はっ♡

はっ♡



うぎっ
ッッッ

ヒッ
ッッ

ズビ
ズビ

ん
ん

「うあっ♡だめっ♡兄ちゃんっ♡
おれ、もうイっちゃうっ♡
イっちゃうっよお…♡」

「んあっ♡あっ♡ああっ♡お腹の中
グリグリされて…っ♡はあっ♡」



はん
はん
はん

ズ
ズ

「ら、め…っ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクうー…っ♡」

「あああああっ♡んぐっ♡はあっ♡ひうっ♡くうう…っ♡ああっ♡」

びる
びる



両親に隠れながら弟のケツ穴と乳首を
開発する毎日。

何度もしたおかげか、今では少し弄る
だけで簡単にイクようになっていた。

ぐりぐり

グー

どろ

うぐ





「ちょっと抓っただけでこんなに
感じてる癖にやめろだあー!」

「乳首弄られて勃起させてるのに、
なに心にもないこと言ってるんだ!」

「女みたいな声で喘ぎやがって!自分の
彼女に申し訳ないって思わないのか!」



「ちんぽビンビンにさせながら、ケツ穴
物欲しげにヒクつかせて。そんなに
俺のデカチンで犯して欲しいのかよ？」

「ったく！とんだドスケベ
オナホだなお前はっ！」

はん
はん
はん

く
り
く
り
く
り

う
ぐ
ぐ

ど
ろ
ろ

「ひぎゅっ♡うきゅっ♡
変なこと言いながら弄る、なあ♡」

「乳首で感じながら生意気なこと言い
やがって!今からたっぷり生はめして
どっちが上か教え込んでやる!」

はん
はん♡

く
り
く
り

あ
ぐっ♡

ど
ん



「おほっ♥チンコの吸い付き半端
じゃねえな。流石俺専用のオナホだ」

「ひぐっ♥そこ、だめっ♥あぐうつ♥
なん、で気持ちいいとこばっかり
分かるの…っ♥」

うぐッ

どッ

いっ!
いっ!

ひゅっ
ひゅっ

「どうだ？俺のチンポぶち込まれて嬉しい
んだろ？こんな締め付けてきて嫌なわけ
ないよな」

「あ、ぐうつ♡あ、あつ♡はあつ♡
んひいつ♡…ダメ、だよ兄ちゃん♡」

「こんなの続けられたらあつ♡
はあつ♡おれ、のお尻本当に
兄ちゃん専用になっちゃう…っ♡」

どっ

あああ



「ダメだつてならそれなりの素振りを
しろよ！逃げるどころかグリグリ自分
から押し付けてきやがって正直な奴だなっ」

「あっ♡あぁっ♡だつてっ、だつてえ…っ♡
兄ちゃんにお尻の穴犯されるの気持ちいい
んだもんっ♡」

どっ

いっ！
いっ！

ハッ！
ハッ！
ハッ！

はぁっ

「ひあっ♡ああっ♡んほお♡お腹の中
ゴリゴリされるのいいよおっ♡」

「こんな、すけべケツマンコ持ちに
彼女がいるなんて絶対おかしいぞ！」

「くそっ！ホモセックスでアへ顔
晒してる姿見せてやりてえぜ！」

どッ

いっ！
いっ！

ハッ！
ハッ！
ハッ！

んっ♡
んっ♡
んっ♡

あ
あ
あ
あ
あ



「ふっ！ふぎゅうっ！」

「おらっ！彼女に謝れよ！男と浮気した
挙句、実の兄貴のホモセックスで感じて
ごめんなさいってな！」

「なあ、お前に言ってるんだよ！
気持ちよすぎて喋れなく
なっちゃったか！」

どっ

ふっ

あッ
あッ

ひゅっ
ひゅっ
ひゅっ

うぐッ





「ぐべ…ぐべんなさい…っ♡兄ちゃんとのセックスで気持ちよく、なっちゃってっ♡」

「で、でもっ♡こんな気持ちいいチンポでどちゅどちゅされたら逆らえないから…っ♡」

「ふぎゅっ♡んっ♡あくぅ…っ♡あ、あっ♡しょうが、ないんだあ♡」

どろろ

んん♡♡♡

「お、おおっ♡素直になったら急に
きゅうきゅう締め付けてきやがった♡」

「おらっ！もっとしてやるからお前も
腰振て俺を気持ちよくさせろよ！」

「あっ♡ああっ♡うん、する♡
気持ちよくするからあ♡」

「だから兄ちゃんのザーメン奥に
ドピュドピュってだしてえ♡」

ぞっ

んん

ああ♡

んん♡
んん♡
んん♡

パンパンと肌がぶつかると乾いた音を
立てさせ、壊れるくらいにガツガツと
激しく求める。

媚びるように淫らにうねる尻肉に腰が
浮きそうになり。そのまま根元まで深く
押し付けると奥へ奥へと射精した。





「あひい♥あつついのがじんわり奥に
広がって…っ♥あっ♥ん、んっ♥
イクイクっ♥イっちゃう…っ♥」

「おおおっっ♥すげえ気持ちいいぞ
めっっちゃ精子出るわ♥う…っ♥ふう♥」

どっ

ハッハッハッ

ああ

んんん
んんん



弟を調教しだして数日たった。

弟は俺に犯されたことを両親にチクることもなく、表向きは普段と変わらないように振舞っていた。

…ただ最近俺の顔を見ると頬を染め妙に熱い視線を送ってくるようになった。



これはあれか？誘い受けと言うやつなのか？

俺はそれを確かめるため、二人っきりになった時を見計らい弟の尻を後ろから鷲掴み身体を引き寄せた。

弟は一度ビクリと体を震わせるが俺の顔を見つめると、そのまま身を寄せしなだれかかり、ぼそりと小さくつぶやいた。



「…あの、さ。今日父さんたち
帰ってくるの遅くなるってさ…♡」

火照り期待する目を向けられる。

雌の匂いをプンプンとさせる弟に俺の
イチモツは硬く反りあがってしまった。





「ちゅぶ…ちゅ♡ちゅる♡れろお♡」

「ひうつ♡あ、あうつ♡まって…っ♡
さ、流石にこれは恥ずかしいよ兄ちゃん♡」

どっ

Ah♡ Ah♡

ビュ♡ ビュ♡

ん♡

ア♡

「ちゅぶ…今更なに、かまとぶってやがるんだよ。物欲しそうにヒクつかせて本当は俺としたいくて我慢できなかったんだろ？」

「こんなケツ穴柔らかくして…俺がする以外でも一人でアナニーしてほじくり回してたんだろ？」

「んひいっ♡だ、だってそっちの方が兄ちゃん喜ぶと思って…っ♡」







「だって兄ちゃんがいつでも出来るようにしろって言ったんだろ」

「俺、言われた通りにしてたんだぞ。だから、さ…♡その、ご褒美が欲しいな♡」

はぁ♡

ぐんぐん♡

Akko♡
Akko♡

アッ♡

「ふぁ♡あぁあっ♡入ってくるう♡
ひあっ♡あ、あっ♡あぐうっ♡」

「んひいっ♡ケツ穴に熱くておっきな
チンポがズブズブって来ちゃってるう♡」

「男なのに兄貴のチンポでケツ穴ほじられ
て感じるなんて、ホント変態野郎だなっ」

どっ

ハッハッ

あぁあぁあぁ

あぁあぁ



「だってだって♡兄ちゃんとの
ホモセックス気持ちいいんだもん♡」

「こんなの覚えさせられたら、もう
女とのセックスなんてできないよぉ♡」

「ははっ!とんだ淫乱だな。しょうがない
から俺以外のちんぽじゃ満足できない
体にしてやるよ!」

どっ

ハッ

フズッ

あッ
あッ



「おおっ♡あ、あああっ♡ふあっ♡
うあっ♡んっ♡んんっ♡っ♡」

「おおっ♡締まる締まる！熱々の尻肉が
ちんぽに絡みついてきやがるっ♡」

チンポの快感を覚えてしまった弟は
激しく奥を抉るたび、艶やかな喘ぎ声
を辺りに響かせる。

どっ

ハッハッ

あッ
あッ

はあ♡





「おほおっ♡お、おおっ♡雄ちゃんぽで
奥どちゅどちゅ叩かれて…っ♡」
「はあっ♡んっ、あああああっ♡
兄ちゃんにメスイキさせられ
ちゃうよお♡」

ああ♡

どっ

ハッ

あッ
あッ

「良いぞ良いぞ！どんどん
雌らしくなってきたな」

「そろそろザーメンをケツマンコに
中出ししてやるからケツアクメ
決めながらしっかりと受け止めるよっ」

「うんっ♡だしてだして♡兄ちゃんの
濃厚ザーメン。俺の直腸に沢山ちょう
だい♡」

どっ

ハッハッ

あッ
あッ

んっ♡



びゅぶ、びゅぶる、びゅぶぶるるっ♡

「おっ♡おっ♡おお…っ♡きたあ♡
熱々ザーメン俺の中にいっぱい…っ♡」

体重をかけ、ねじり押し込みながら
すべてを吐き出すように射精する。

どっ

ハッハッ

ビュン
ビュン

はあ♡



「ふっっ♥弟をケツ穴オナホにして
犯すの最高だな」

「はあっ♥はあっ♥…んっ♥
おれ、も…♥これすきい…♥」

「んあっ♥は、あ♥ああっ♥すごっ♥
まだまだ中でビクビクって…っ♥
こんなに硬い♥」



溢れ出るほどのザーメンを懸命に受け止める弟の姿にイチモツは再び硬く反りあがる。



「んぐっ♡じゅぼ♡じゅるるっ♡
じゅぶ…じゅぶぶっ♡」

「うおっ！すげえ吸い付きだな。

男の癖に何処でこんなの覚えたんだよ」

「はあ♡温かい舌がヌルヌル
からんで、最高だなこのロマンコ」



「おらっ！もつと奥まで入れて
やるからしっぴかり啜えろよっ」

「うっ！おぼおっ♡おへえっ♡
おっ…おおおっ♡」

「…っ♡ガンガン突けば突くほど
喉がキュンキュン締まって…っ！」



「おっ♡んふ、お、ぶっ♡ううっ♡」

「ああっ♡気持ちよくて腰が勝手に動いちまう」

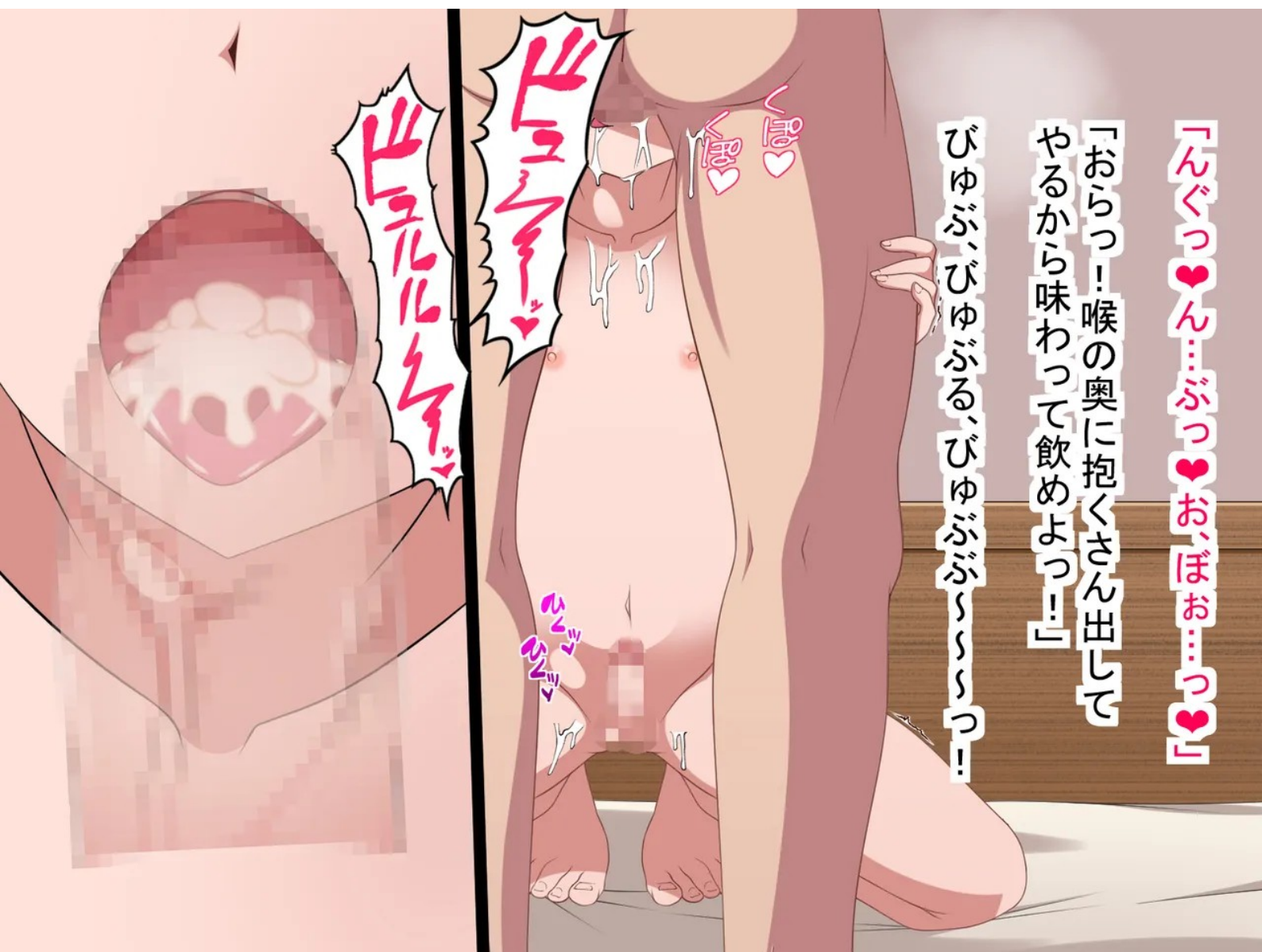
「けど別にいいよな。お前は俺のモノなんだからこうやって使われるのは嬉しいだろ？」



「んぐっ♡ん…ぶっ♡お、ぼお…っ♡」

「おらっ！喉の奥に抱くさん出してやるから味わって飲めよっ！」

びゅぶ、びゅぶる、びゅぶぶるっ！





「あゝ、なんか小便したくなってきたな。
……丁度いいしこのまま出しちまうか」

「んっ?! んぶっ! んんっ!!」

「チンコ啜えてたら
何言ってるか分からねえよ」



じよろ、じよぼぼっ！

「ん、んっ！んぶっ！んっ！
んぐ…っ！」「く…」「きゅっ！」

「お、おっ！出る出る♡
はぁっ♡めっちゃ出る♡」

「う、うっ！」

「おいおい、そんな目で見るなよ。
またシたくなって来るだろ」

「ハァァァ…」

「んっ！んっ！んっ！」

「んっ！んっ！」

「んっ！んっ！」





「あっ♡あっ♡兄ちゃんのチンポ
気持ちいいとニトニトンして…♡」

「ふ、あっ♡そこ、いいっ♡んんっ♡
あ、あああ〜っ♡は、あ…っ♡
はあっ♡兄ちゃんもっとしてえ♡」

あぁ♡
あぁ♡

ひゅ!
ひゅ!

はぁ♡

はぁ〜ん♡

ひゅ♡



「何がもつとだっ！俺のモノの分際で許可なくイキまくりやがってっ！おらっ！まだまだ賤が足りてねえのか！」

「ひうつ♡ああ♡乱暴にゴリゴリされるのもすき♡あう♡」

「うひい♡んあ♡あ、あ、ああ♡イキすぎて体が勝手に震える♡」

アッ
アッ

ビクッ

ハッ♡
ハッ♡
ハッ♡

ビクッ♡

うぐッ

「まったく！誰のおかげでメスイキできるか
分かってんのかっ！おらおらっ！もっと
感謝してケツマンコ締めろよ！」

「ひぎゅっ♡わかったっ♡わかったから、
そんなにグリグリ焦らさないでえ♡」

Ah
Ah♡

ビュッ

ハ
ハ♡

ビュ♡

うぐッ





びん♡

ハッ♡♡♡♡♡

あああ♡♡♡♡♡

「おほおっ♡んほおっ♡♡♡
ん、んあっ♡やああっ♡ああああっ♡
お尻ぞりぞりって挟られて...っ♡」

「うぐっ! この淫乱オナホがつ!
エロい顔で発情しやがって!」

びん

Axx
Axx♡

まるで別の生き物のように粘膜が
ねっとり肉棒に絡み包み込む。

極上の快楽に直ぐにでも射精したく
なるが、少しでも長くこの快感を
味わいたく俺は必死に我慢する。





「だ…って、兄ちゃんとのケツ穴
セックス気持ちよすぎなんだもんっ
うあ♡ひ、ぐうっ♡おれ、もう…っ♡」
「兄ちゃん、一緒にっ♡一緒にイこ…っ♡」
「ああ、イクぞ！中に
出すからケツアクメしろっ！」

ビュッ

んん

ビュッ♡

ハッ♡

んん♡
んん♡



びゅるゝゝゝっ! ぶびゅるるっ!

「おほおっ♡おおっ♡ふぎゅっ♡
なかにザーメンドピュドピュ
出されながらイクのすきい♡」

「はうっ♡ああっ♡ああっ♡
すっごお♡頭の奥チ力チ力するう♡」

びゅる
びゅる
びゅる

はぁ♡

はぁ♡

びゅる♡



いくら出してもまるで飽きがこず
何度もしてしまいたくなる。

こういう奴を魔性と言うのだろう。

はぁ♡

はぁ♡

んん

んん

んん♡

んん♡

「お前最近全然出かけたりしてないけど彼女の事は良いのかよ？」

「……あのさ。俺をこんなにした張本人がいまさら何そんなこと言ってるんだよ」

「彼女とはとっくに別れたに決まってるだろ。それに彼女が欲しかったら兄ちゃんと違って俺はいつでも作れるしね」

「…むっ！」



「あはっ♡もしかして怒った？
…それとも嫉妬しちゃった？」

「……」

「えっ？あれ？本当に怒っちゃった？
ね、ねえ…兄ちゃん」



俺は無言で弟の手を取ると、のしのしと
早歩きで自室に向かう。最近は行為にも
慣れてきたからなのか弟は調子に乗ってる。

ここらで一つ誰が上なのかを思い出さ
せる必要だあるようだ。



「あ…なに、これ？兄ちゃん」

「俺からお前へのプレゼントだよ。
どうだ？嬉しいだろ？」

俺はそう言う通販で買った首輪に
リールを付け、両手を拘束したままの
弟の尻穴に肉棒を挿入する。

アッアッアッ

ハァハァハァ

ビクッ

はぁ♡



「んひいつ♡兄、ちゃん…いきなりすぎいい♡」

「お前の全部は俺のモノなんだ！
他の奴とすることも俺以外の恋人を
作るのも許さないからな！」

あゝあゝ

「はあっ♡はあっ♡あっ♡…んあっ♡
こんな首輪まで付けさせて…兄ちゃん
俺のこと好きすぎだろ♡」

どん

ハァハァハァ♡

はあ♡



「そんな独占欲出さなくてもいいのに、俺が誰かに取られちゃうって思ってる？」

「っ！この…クソっ！最近ようやく大人しくなったと思ってたのに、また生意気になりやがって…っ！」

「おらっ！どっちが上か、また教えてやる！」

いっ！
いっ！

アッ！

んんん
どっ



「あはっ♥俺のケツマンコでこんなに
硬くしてるのに、すごい自身満々だあ♥」

「ふふ♥きてえ♥兄ちゃんの
カリ太チンポでお仕置きしてえ♥」

ひゅッ♥

いっ!
いっ!

あああ

ハァー♥
ハァー♥
ハァー♥

どッ



「ふあっ♡あああっ♡おっ♡おおおっ♡」

「く、う…っ！柔らかいふにふにの尻
押し付けてきやがって…っ！こんなの
もっとしたくなるだろうが！」

いっ！
いっ！

ひゅッ♡

ハァ♡ハァ♡ハァ♡

どッ♡

あぐ♡



「おほおっ♡おおおっ♡動物の交尾
みたいにパンパン乱暴にされるの
気持ちいい…っ♡」

「頭の奥で火花がチカチカして
止まらない…っ♡」

はん
はん
♡

いっ
いっ

ひゅっ

どっ

はー
はー
♡



「おらっ！俺だけのメスなんだって
認める気になったか！いや、認めるっ！」

「っ♡：うん♡もう彼女も作らないし
兄ちゃんだけのメスになるっ♡」

「だから、ちようだい♡兄ちゃんの熱々
ザーメンでお腹いっぱいにしてえ♡」

いっ！
いっ！

あああ

ハァーハァー♡

どっ

ひゅッ♡



びゅるるるっ！ぶびゅるるっ！

「あっ♡ああっ♡きもち、いい…っ♡
んひいっ♡ひう…っ♡ちんぽ中で
膨らんで♡びゅっびゅっ出てるう♡」

「二人でイキまくって勝手に浸ってるん
じゃねえ！まだまだ俺は萎えてないから
このまま続けるぞ！」

ビュッ
ビュッ

あ
あ
あ

ハ
ハ
ハ

ん

ん



汗と精液でドロドロになった俺たちは
邪魔な拘束とリールを外し、ただひた
すらにお互いを貪るセックスを続ける。

ビュッ

アッ
アッ

グッ
グッ

くっ
くっ



「はあっ♡んあっ♡す…」っ♡さっきから
ずっとしてるのに兄ちゃんのちんぽ全然
萎えないのな♡」

「お、おっ♡ガチガチちんぽでアナル
トロトロにされちゃって…♡ふあっ♡
ん、はあっ♡お腹の奥、痺れ、ちやうっ♡」

深く突き入れる連続ピストンに耐えきれず
弟の体はイキ癖がついたようにビクビク
と痙攣する。

あ♡あ

あ♡あ

「すきい♡兄ちゃん好きなの…っ♡
離れたくない…ずっと繋がって
いたいよお♡」

「…っ！どんどんエロくなってムラムラ
させやがってっ！お前、産まれてくる
性別間違えてるなっ」

「…まあ、男でも女でも俺のもんになる
のは変わらなかったけどよっ！」

あ♡あ

あ♡あ

「おらっ！俺のザーメン欲しかったら
ちゃんとおねだりしてみろ！」

「うんっ♡これから、いつでもどこでも
全部俺が受け止めるからっ♡兄ちゃんの
ザーメン俺のお尻に出してください♡」

あゝ
あゝ



「よし、いい子だ。その言葉忘れんなよっ。
お前をイカせられるのは俺のチンポだけ
だってよく理解してイキやがれ！」

ビクッ

アッ
アッ

はん
はん
♡



びゆるゝゝゝっ!ぶびゆるるっ!

「あ、あぁっ♡イク、イク…っ♡奥に気持ち
良いのいっぱい出されて…んひいっ♡
俺、ケツアクメして、とんじやうっ♡」

「…はぁっ♡…はぁっ♡んはぁっ♡
こんな幸せなの、忘れられないよ♡」

はん♡
はん♡
♡



下腹部から伝わる気持ちよさに目が覚めるが、状況を理解するのに数秒かかってしまう。

何故か俺の上に跨り腰を振っている弟。

先ほどまで寝ていたというのに俺の肉棒は快樂のままに弟の尻肉を味わっていた。



「お、おい…っ。こんな時間に何してんだ
お前っ！今は父さんたちが居るんだぞ」

「…あはっ♡起きたんだ兄ちゃん♡」

俺が起きているのに気づいた弟は顔を
近づけ、嬉しそうに…そして少し濁った
瞳で微笑む。

ハッハッハッ♡

ハッハッハッ♡

ビクッ

アハハハ

はめ♡

「...兄ちゃんがいけないんだよ？
家族で...それに男同士だから俺、
好きだって気持ち諦めていたのに...」

「それなのに兄ちゃん俺のこと犯して...
極めつけにこんな物までくれて自分の
所有物扱いするんだもん♡」

「こんなの、もう我慢できるわけないよ♡」

ハッ♡
ハッ♡

ハッ♡
ハッ♡

ビュッ

アッ♡
アッ♡

はめ♡

「おま、え…いきなり、何言ってるんだ？」

「ふふ♡気付かなかったでしょ。」

「構って欲しくて意地悪なこともしてたけど、本当は…ずっと、ずっと前から俺、兄ちゃんのこと好きだったんだよ♡」

グー

ハハハハ

ビーン

アハハ

んん



「けど今は、兄ちゃんから俺を
求めてくれるし愛してもくれる」

「だから今の関係が全部壊れたって。
俺はもう兄ちゃんに対するこの
気持ちを隠したくないんだ」



「……こんな俺でも兄ちゃんは
受け入れてくれる？」

フー
フー





「なに当たり前のことと言ってやがるっ!!
ああゝっ!もうバレるとかどうでもいい!」

まるで引き返すなら今のうちだと言われた
みたいでカチンときた。



「お前は俺の恋人兼オナホなんだから
余計なこと考えないで俺に抱かれて
いればそれでいいんだよ！」

俺を見下ろしてた弟に容赦のない
突き上げをくらわす。



「ひあっ♡ああっ♡あうっ♡
に、兄ちゃん急に激しくされたら
声漏れちゃうよっ♡」

「勝手に始めて先に喘い
でたのはお前だろっ!」



「変なこと言っつて俺を試そうとしやがって！あれだけ犯したのにまだ躰がたりなかったか！」

「ふあっ♡ああっ♡だっつて…だっつてっ！俺、兄ちゃんに捨てられないか不安で…っもしそうなるなら自分からっつて…っ！」

いっ！
いっ！

どっ

んん

「うるせえっ！言い訳すんな！」

「どんなことになっても絶対に
お前を手放したりなんかして
やらねえからなっ！」

「おらおらっ！わかったならケツ
マンコでアクメ決めて返事しろっ！」



ああああ

いっしょに

どっ

いっしょに

「うんっ♡イクっ♡イクよ兄ちゃん♡
だからもう絶対に離さないで…っ♡」

「当たり前だ！おらっ！」

「特濃ザーメン受け止めやがれ！」

びゆるるるっ！ぶびゆるるっ！

びゅん
びゅん

ビュッ

はめ♡



「んあああつ♡す♡、いっ♡あっつい
ザーメンで満たされて…っ♡」

「お、おおおっ♡兄ちゃんの気持ち
伝わってくるっ♡はあっ♡あっ♡
んあっ♡幸せすぎてイクの止まらない♡」

「あ、あああつ♡すきい♡
兄ちゃん大好きだよお♡」

んんん
んんん

んんん

んんん





















































